

主題研究

高等学校における総合的な学習の時間の推進に関する研究

- 「知の総合化」を図る体験的な学習活動をとおして - （第2報）

「総合的な学習の時間」研究班

佐々木 政 義 夏 井 敬 雄
菊 池 美 香 佐 藤 政 則

研究協力校

岩手県立大迫高等学校
岩手県立遠野高等学校

研究協力員

岩手県立軽米高等学校 清 水 千日代
岩手県立遠野高等学校
情報ビジネス校 菊 池 由紀子

研究の概要

この研究は高等学校における総合的な学習の時間において、各教科の学習内容を相互に関連付け、生徒の「学校知」と「生活知」を再構成する「知の総合化」を図り、総合的な学習の時間が学習意欲の向上と「生きる力」の育成につながることを明らかにしようとするものである。

2年次研究の完結年度である今年度は、昨年度の教職員対象の意識調査をもとに、長期的な視点に立った計画を作成し、実践をとおしてその有効性について検討した。

その結果、生徒の意識において「学校知」を総合的な学習の時間と関連付けて考えるようになるなどの大きな変容が見られたと同時に、各教科への学習意欲の高まりが確認された。

キーワード：生きる力 知の総合化 教科の学力 高等学校の独自性

研究の目的

今回の学習指導要領の改訂において、総合的な学習の時間は、変化が激しく多様な現代社会の価値観に対応するために、「生きる力」の育成の必要性から導入されたものである。特に高等学校では、生徒が興味・関心、進路希望等に応じて設定した課題について、体験的な学習活動をとって知識や技能の深化、総合化を図る、教科横断的な学習活動の展開が求められている。

しかし、高等学校においては、教科・科目別の学習活動が中心であり、新たに学んだ内容を既習の知識や過去の体験と相互に結び付けて、教科の枠を超えて体系化する指導には至っていない。また、生徒自らが学び、考えるための環境づくりなど、新たな指導への取り組みも始められつつあるが、充分ではない。

このような状況を改善するためには、地域や学校の特色を踏まえながら生徒主体の体験的な学習活動を行い、各教科の学習を相互に関連付けることによって、いわゆる「知の総合化」を図る総合的な学習の時間を計画・提示し、推進していく必要がある。

そこで、この研究は「知の総合化」を図る体験的な学習活動をとって、高等学校における総合的な学習の時間の在り方を明らかにし、その推進に資するものである。

研究結果の分析と考察

1 「知の総合化」を図る体験的な学習活動をとった総合的な学習の時間の推進に関する基本構想

(1) 高等学校における総合的な学習の時間の推進の必要性

総合的な学習の時間は「新学習指導要領」の理念的な裏付けとなった第15期中央教育審議会第1次答申（平成8年7月）で、その創設が提言された。この答申の記述から、創設理由を以下の二点にまとめることができる。

- ・「生きる力」を育むために、横断的・総合的な指導が必要であること
- ・社会的要請となっている国際理解教育、情報教育、環境教育を行うために、横断的・総合的な指導が必要であること

これらから明らかなように、総合的な学習の時間は、変化が激しく多様な価値観がある現代社会に対応するために、「生きる力」を身に付けさせる必要があるとの考えから設置されたものである。そして「生きる力」の育成のためには、これまでの「与えられたものをひたすら獲得していく」という知識定着が中心の学習では、各教科の独自色が強く、転移、発展に至る総合化は児童・生徒に一任されており、総合的な指導が十分にはできない。また、上述の社会的な要請は、今や一教科・一領域で担える段階にはなく、従来の範疇をはるかに超えたものになっている。今後は、様々な教科・領域の内容や方法を相互に関連付けながら、教科の枠を超えた総合的な視野をもって現実の社会問題や生活的課題の解決について学ばなければならない。そして、児童・生徒が自らの確に対応していくために必要な知識や技能、価値観、態度や行動力を、一貫性のある追求のなかで、総合的に獲得していくことを可能にする総合的な学習の時間の推進の必要性がある。

(2) 「知の総合化」を図る体験的学習活動の意義

教科学習における知識や認識はともすれば部分的となり、しかも実生活から遊離しがちな傾向をもっている。このことは、教科が教科独自の系統性を備えている限りやむをえない。これに対して総合的な学習は、さまざまな体験活動を展開することが可能で、教科の学習と結び付けることにより、教科学習における認識に現実感を与える働きをする。体験が教科の学習に生かされたり、教科における知識や技能が総合的な学習の時間で生かされたりすることによって、認識と体験を結び付ける能力が育つことが期待される。

(3) 「知の総合化」の定義

教育課程審議会の答申（平成10年7月）には、「各教科等で身に付けられた知識や技能などが相互に関連付けられ、深められ、児童生徒の中で総合的に働くようになる」との記述が見られる。このように、総合的な学習の時間は「知の総合化」といわれ、教科の学習が基盤となっている。つまり、総合的な学習の時間の第一の役割は、各教科等における学習の成果を関連付け、総合化する点にある。この総合化とは、各教科で学んだ知識や技能、方法等が、総合的な学習の時間において、個人の体験と関連付けられ、新たに体系化され、現実的な能力へと変化することを意味している。

そこで本研究では、「知の総合化」の構成要素を次のように考える。

- ・学校知とは、概念が優先し、実体験をとまなわれない。観念的、客観的、仮想的な知である。
（「学校」とは場所を指すのではなく、「学校教育」を指す）
- ・生活知とは、個々人が生活のなかで身に付けていくものである。授業中に学習したことで、実際のであれば、生活知に近いものと言える。
- ・再構成力とは、学校知と生活知を自分で分析・考察し、独自の知識体系を構成し、「生きる力」へ結び付けていく能力である。

(4) 「知の総合化」が高まった姿

知の再構成による総合化とは、自分のもてる知を総動員し、新たな発想によって組み替え、自分なりの知を創り出す過程であり、そこには必ず自らの知的な分類・分析能力・構成能力が必要である。

そこで、「知の総合化」が高まった姿を次のようにとらえることとする。

- ・豊富な知識と幅広い体験をもち、高い見識が培われている。
- ・学力が向上し、学習意欲が高まっている。

2 「知の総合化」を図る体験的な学習活動をととした総合的な学習の時間の推進に関する実態調査及び分析と考察

(1) 実態調査結果の分析

この調査は、平成15年度から本格実施される総合的な学習の時間に関する県内高等学校に勤務する先生方の意識と各学校における総合的な学習の時間の取り組みの実態を把握するため、平成14年10月10日～18日に実施したものである。県立本校78校、県立分校6校、市立高校1校、私立高校13校の全教員（休職・長期出張等を除く）3,651人のうちの95.5%に相当する3,483人（実施校教員1,655人、未実施校教員1,828人）から回答を得た。

調査の結果、総合的な学習の時間を導入しても、教育的効果は期待できないと回答した教員は実施校で41.4%（682人）、未実施校で41.2%（748人）である。どのような理由で効果がないと考えるかを尋ねてみると、「生きる力に結び付かない」が全体（全教員）の27.9%、「学力の低下が危惧される」が全体（全教員）の22.8%を占めている。これは実施校では生徒の「生きる力」に、未実施校では生徒の「学力」に関心が置かれていることの現れである。年代別では、30代が「生きる力」に、40代、50代は「生きる力」と「学力」に効果がないと答えている。こうした「学力低下の危惧」や「生きる力と結び付かない」という理由から中堅教員は総合的な学習の時間に期待が持てないでいる。こうした中で、総合的な学習の時間を推進するために、どのようにして「学力低下の危惧」を払拭し、「生きる力と結び付く」学習活動を実践すればよいかを具体的に示すことが何よりも重要である。

総合的な学習の時間と教科等との連携について、主としてどのように実施しているか、また、実施する予定かを尋ねてみると、実施校の45.6%がLHRや学校行事と連携させている実態、また、未実施校の50.9%が総合的な学習の時間を「課題研究」で代替しようと考えている実態がわかる。これは、未実施校53校中23校が農業・工業・商業・水産等の職業学科を有する学校で、現在、行っている課題研究を来年度以降の総合的な学習の時間に実施しようとするためであると考えられる。

(2) 総合的な学習の時間にかかわる意識の類型化

全教員に対して、考えていることを自由に記述してもらった。この記述から、総合的な学習の時間にかかわる教員の意識を8タイプに分類したものが【表1】である。

【表1】総合的な学習の時間にかかわる意識の類型化

-	+
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>無用論型</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理想と現実のギャップを感じる ・環境が整わない </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>多忙拒否型</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多忙が増すだけ ・時間と労力が想像を絶する ・不安なまま準備もそこそこに実施するのはたいへんな重圧 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>設備条件型</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予算も教室も図書もない ・教員も増やさないと無理である </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>教科優先型</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進学校、専門校では様々な取り組みが可能であると思うが、そうでない高校では基礎基本の学力定着の方を優先すべきだ </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>積極実施型</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒たちの顔が生き生きとする時間なのでぜひ継続して指導してほしい </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>計画実施型</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小・中での総合の取り組みを知ったうえで高校での授業をしていきたいと思うので、近隣の小中高との連携も図ればよいなあと感じている ・半年間に2時間実施するといろいろな方向に使える </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>不安実行型</p> <ul style="list-style-type: none"> ・面白いものだと思うが、テキストやマニュアルがほしい ・研修会を実施してほしい </div>

白紙

(3) 総合的な学習の時間の推進にかかわる課題

ア 「知の総合化」

高等学校では、今一度自分の学校の教育目標を見つめ直し、卒業までにどのような生徒に育てて社会に出したいのかを全校で再確認しなくてはならない。そこから生徒の現状を鑑みると、在学中に生徒に付けたい「力」が明確になってくる。

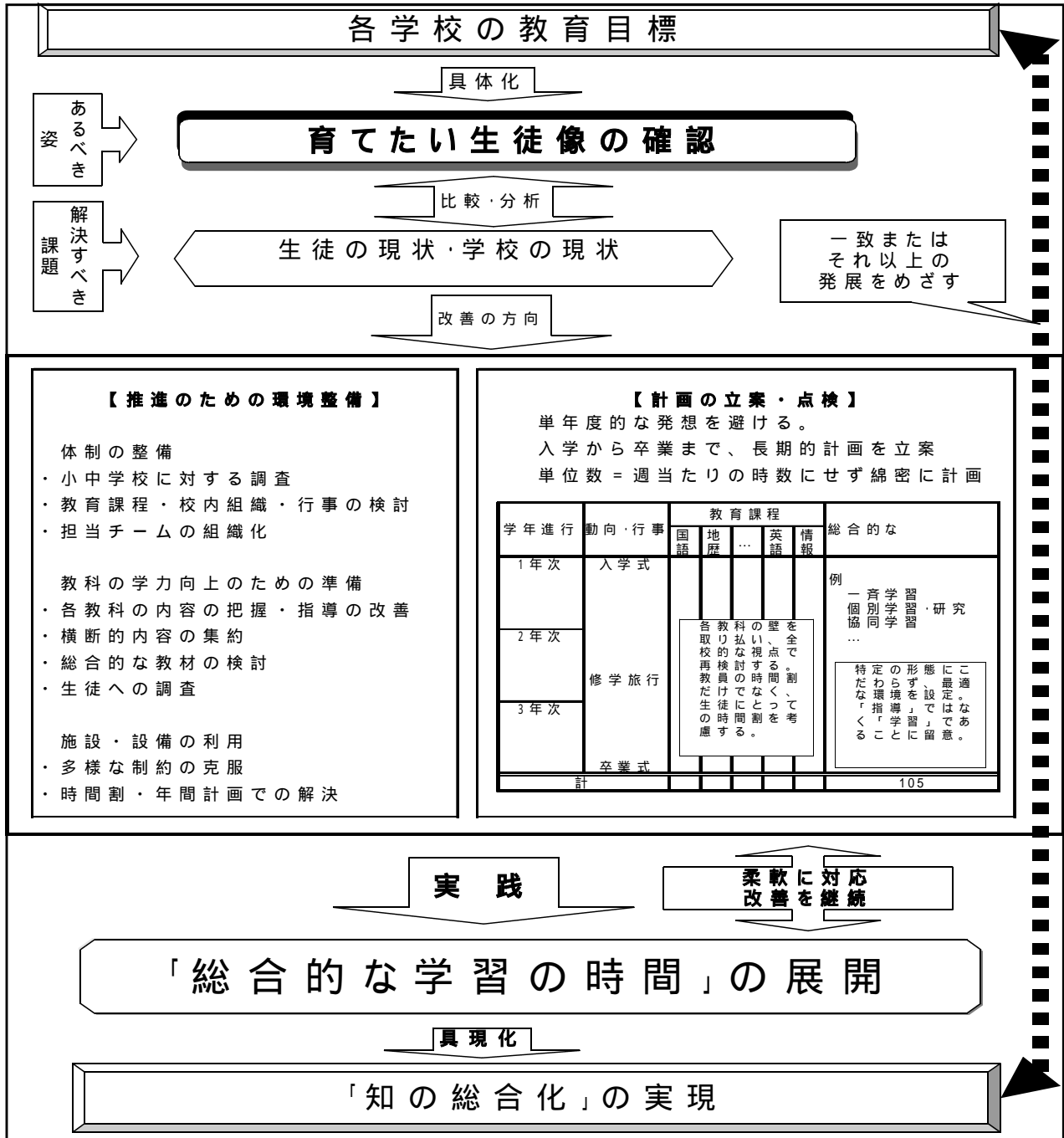
生徒に身に付けてほしい「力」として、多くの高校に共通するのが「知」であろう。義務教育段階からの基礎基本に立ち返るべき学校もあるし、教科ごとに分類された知識の単純な堆積から発展しようとして悪戦苦闘または暗中模索している学校もあるだろうが、学力が身に付けば、多くの否定的な意見は解消するうえに、生徒自身が「この高校に入ってよかった」と思ってくれるはずである。どの生徒も本当は勉強ができるようになりたいし、新しいことを学んで理解できればおもしろいと感じるにちがいない。その気持ちを素直に表現できない生徒が多数派であるから、学校が配慮して体制を整える必要がある。そのためには従来の教科指導を超えた取り組みを学校全体で行う必要がある。それが高校における「総合的な学習の時間」である。

イ 体制整備の必要性

教育課程上で単位数を設定するだけでは不十分である。教科の授業のように機械的に週1時間や2時間と安易に決めず、年間行事計画や各教科の内容、指導の在り方、特別活動等全てを見渡して、重複する内容を精選し、無駄を省き、週5日制の限られた時間内で効果的に実施できる体制を組む必要がある。そのためには学校全体を見渡し、生徒をよく見て、臨機応変に対応できる担当チームが全校規模で連携を図る必要がある。

(4) 総合的な学習の時間の推進にかかわる基本構想

これまで述べてきたことを基に、【図1】のように基本構想図を作成した。



【図1】総合的な学習の時間の推進にかかわる基本構想図

【表3】 総合的な学習の時間 教科関連年間計画（県立大迫高等学校作成）

学期	月	日	時数	総合的な学習の時間・内容	年間計画						英語	地理	家庭								
					国語	地理	数学	理科	保健	音楽											
1	4	18	1	オリエンテーション	「未来をひらく」	基本的な地名 (都道府県名・国名)	(数学Ⅰ)数と式 ・正数の計算 ・因数分解 ・平方根	物質と人間生活 物質を構成する粒子 原子の構造	健康の考え方 我が国や世界各国の健康のための活動	【歌謡】 発生・校歌	自己紹介・教室 英語の導入	ドイツ語のABC	一生をすこやかに生きる ・家族・家庭								
		21	2	オーストリアについて																	
		28	7	(保健)																	
		6	2	ヨーロッパの食生活																	
	5	16	7	(家庭)										言葉で表現する楽しみ	世界の地形	1次不等式	ウイーン少年合唱団の野ばら 編曲	エーデルワイス サウンドオブミュージック編曲	Lesson1 Listen up1 Lesson2	挨拶の表現	調理実習について
		20	3	シュルツェツェルの調理										人種・民族の分布と民族問題							
		29	2	労働について																	
	6	3	4	栽培作業体験										言葉で表現する楽しみ	人種・民族の分布と民族問題	連立不等式	ウイーン少年合唱団の野ばら 編曲	シューベルトとウエルナーの野ばら	Lesson2	挨拶の表現	調理実習について
		4	7	(家庭)																	
		8	7	(ドイツ語)																	
10		2	葡萄酒について・コンピュータの基礎																		
2	7	25	7	(地理)	考える楽しさ 話題や例を入れて述べる	気候と人々の暮らし オーストリアの気候と暮らし	2次方程式	原子の電子配置 イオンからなる物質 分子と金属の成り立ち 元素・周期表	健康の保持増進と疾病の予防 喫煙や飲酒に対して世界各国の対策	夏の思い出 バイヴァルディ四重奏	Lesson3 Presentation	数字	一生の夢みを究める ・高齢者の生活								
		3	4	栽培作業体験	聞き書き																
		10	2	葡萄酒について・コンピュータの基礎	体験を聞いてまとめる																
		18	7	(保健)																	
	8	21	7	(家庭)	考える楽しさ 話題や例を入れて述べる	気候と人々の暮らし オーストリアの気候と暮らし	2次関数 ・平方完成 ・グラフ ・最大最小	少年時代 ハッハ、トゥカータとフーガ編曲 (リコーダー)	Believe	Lesson4	名前・出身・年齢・意味の聞き方、答え方	テーブルコーディネート ヨーロッパと日本の比較									
		25	7	(英語)																	
		26	2	ワインについて・コンピュータの基礎																	
	1	2	大迫ワインについて																		
	3	9	24	7	(国語)	スピーチ 友人を紹介するスピーチをしよう	近隣諸国の生活と文化(中国・韓国)	・2次関数の決定 ・2次不等式	原子量と分子量 物質の濃度 物質の文化と化学式	精神の健康	(日本民謡)	Lesson5	好きな飲み物・食べ物の聞き方、答え方	一生の土台を築く ・子供的生活							
			20	4	収穫作業体験																
21		3	資料整理と発表準備																		
24		2	研究発表会																		
4		7	(理科)	自由に表現してみよう	世界諸地域の生活と文化 オーストリアの文化	場合の数									教師について 化学反応式が表す量的関係	交通安全	Lesson6	オーストリアの食生活について			
10		7	(地理)																		
28		7	(ドイツ語)																		
4	12			挿句で表現	地球の課題 ・人口 ・環境 ・エネルギー	確率	物質の変化 物質の性質 有機化合物	応急手当	Lesson7	特別・確段の聞き方、答え方	生活力をはぐくむ ・衣生活										
	1	22	7	(ドイツ語)	調査・報告	地球の課題 ・人口 ・環境 ・エネルギー	集合と論理	物質の変化 物質の性質 有機化合物	応急手当	Lesson8	ヨーロッパの通貨について	ヨーロッパの衣生活について									
		28	7	(家庭)																	
	2				調査・報告	地球の課題 ・人口 ・環境 ・エネルギー	集合と論理	物質の変化 物質の性質 有機化合物	応急手当	Lesson8	ヨーロッパの通貨について	ヨーロッパの衣生活について									
3				調査・報告	地球の課題 ・人口 ・環境 ・エネルギー	集合と論理	物質の変化 物質の性質 有機化合物	応急手当	Lesson8	ヨーロッパの通貨について	ヨーロッパの衣生活について										

(2) 実践の概要と実践結果の分析・考察

ア 「総合的な学習の時間と関連付けた家庭」の授業実践

生徒は総合的な学習の時間に関するガイダンスの後、ALTであるオーストリア人のアンドレア先生から、4時間にわたってオーストリアの産業、文化、食生活についての授業を受けている。生徒はオーストリアの国勢を知ったり、オーストリア出身音楽家の曲を聴いたりする中で、来年度修学旅行で訪れる国について「自分の知らないことがこんなにもあるのか。もっといろいろな面が見えてきそう。(4/21)」と関心を高め、これからの総合的な学習の時間に対する意識付けになったと考えることができる。その後、調理実習「シュニッツェルの調理 - オーストリア風カツレツ、ポトポトスープ作り -」はアンドレア先生と家庭科担当教諭とのT・Tで行われたが、生徒は意欲的に取り組んでいたことが授業記録からわかる。揚げ物は普通教科の家庭科ではあまり取り上げられない調理法であるが、家庭では日常的に作られているので、生徒が授業で学んだことが実生活で生かされるものと思われる。「シュニッツェルは、塩が足りなくて味が薄かったけれど、うまかった。今日の授業では、外国の人々の食文化というものが少しだけわかった(5/20)」との記述から、前時に受けた授業で得た知識が調理実習という体験的な学習をとおして「生活知」に近づいたことを裏付けている。

イ 総合的な学習の時間に関する生徒の意識の変容状況

推進試案に基づく授業実践によって生徒の意識がどのように変容したかを調べるために、「学校知に関する意識」「生活知に関する意識」「問題解決の方法」「教科に関する意識」「知の総合化を図る体験的な活動に関する意識」の観点から調査を行った。以下は、事前と事後に調査を実施し、その結果を²検定(変化の検定)によってまとめたものである。なお、10頁の【図4】の「知の総合化を図る体験的な活動に関する意識」は事後のみの調査である。

(ア) 「学校知」に関する意識

【表4】「学校知」に関する意識

(N = 45人)

調査内容	事後			合計	² 検定 有意差
	+	-	事前		
1 あなたは、総合的な学習の時間で習ったことを各教科と関連付けて考えますか。	+	3	3	6	8.00 *
	-	15	24	39	
	合計	18	27	45	
2 あなたは、総合的な学習の時間で習ったことを日常生活と関連付けて考えますか。	+	6	3	9	6.25 *
	-	13	23	36	
	合計	19	26	45	
3 あなたは、各教科で習ったことを総合的な学習の時間と関連付けて考えますか。	+	7	2	9	8.07 *
	-	13	23	36	
	合計	20	25	45	
4 あなたは、各教科で習ったことを日常生活と関連付けて考えますか。	+	11	4	15	8.91 *
	-	18	12	30	
	合計	29	16	45	
5 あなたは、総合的な学習が「生きる力」に結び付くと考えますか。	+	15	2	17	5.33 *
	-	10	18	28	
	合計	25	20	45	

(注) 1 事前調査は4月18日、事後調査は10月24日に実施した。

2 調査は、ア、イ、ウ、エの四肢選択で行い、アとイをプラス反応とし、アはイより強い反応とした。また、ウとエをマイナス反応とし、エはウより強い反応とした。

3 *印は²検定(変化の検定)において有意水準5%で、有意差があることを示す。

4 ²検定に用いた公式は、次に示すとおりである。

$$^2 = \frac{(b - c)^2}{b + c} \quad \text{ただし } b + c = 10 \text{ のとき} \quad ^2 = \frac{(|b - c| - 1)^2}{b + c}$$

なお、bは-反応から+反応へ、cは+反応から-反応へ変わった数を表す。

前頁【表4】から、「学校知」に関する意識について次のようなことが考えられる。調査項目1「総合的な学習の時間」から「各教科への関連」、同じく項目2「日常生活への関連」ともに、事前調査では否定的回答が圧倒的であったが、事後には肯定的回答が大きく増えた。さらに、否定的な回答の中で、「考えない」から「あまり考えない」へ、一段階プラスに移行している生徒も多い。

項目3の各教科から「総合的な学習の時間」への関連でも、項目1・2と同様に、肯定的回答が増え、特に項目4「各教科と日常生活との関連」では逆転が起き、この研究で目指すところの「学校知」から「生活知」への再構築が実現しつつあると考えられ、このことは、将来的に「学力の向上」「学習意欲の向上」の実現に結び付くものと考えられる。項目5「総合的な学習の時間」と生きる力の結び付きについても、肯定的回答が増えている。

(イ) 「生活知」に関する意識

【表5】「生活知」に関する意識

(N = 45人)

調査内容	事後			合計	検定 有意差 ²
	事前	+	-		
6 あなたは、世の中のいろいろなできごとに関心がありますか。	+	32	2	34	2.50
	-	8	3	11	
	合計	40	5	45	
7 あなたは、国際的な視野で物事を考えますか。	+	11	4	15	4.00
	-	12	18	30	
	合計	23	22	45	
8 あなたは、自分の生活している郷土の特色について関心がありますか。	+	7	3	10	8.89 *
	-	16	19	35	
	合計	23	22	45	
9 あなたは、食べ物の文化や歴史に関心がありますか。	+	8	5	13	8.17 *
	-	19	13	32	
	合計	27	18	45	

(注) 表の見方は【表4】に同じである。

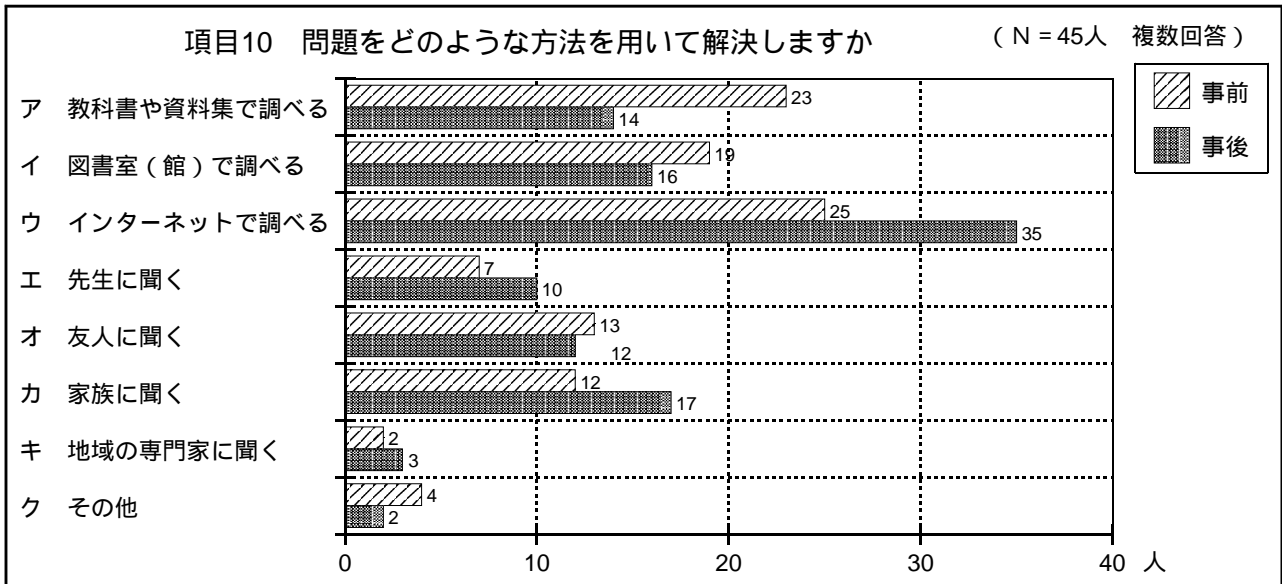
項目6「社会に対する関心」では、事前調査でも肯定的回答が圧倒的多数を占めていたため、事後調査ではさらにプラスの回答が増え、しかも、プラスの中で大多数を占めた「どちらかというと考え」の層を「考える」の層が逆転し、さらに高い段階へ移行した生徒が多い。

項目7の「国際的視野」も、肯定的な回答が増えている。事前事後とも、マイナスのままだった生徒も多いが、これは生徒自身の国際的な経験のなさを強く認識していることの現れと言える。この経験は、二年時の修学旅行において実際に得ることができるので、長期的な視点で生徒の変容を見ていけば、プラスに転ずる瞬間をとらえることができよう。

項目8「郷土への関心」では、劇的な変容が見られた。事前調査では「どちらかというもない」が7割以上、「ない」も含めると否定的な回答が8割以上を占めていたが、事後調査では肯定的回答が半数を超えた。「総合的な学習の時間」において、ALTなど外部の人からの情報の発信を受け、郷土を相対的に見つめる視点に触れ、自らもその視点を得ることができたのだと思われる。項目9も、実践的な体験学習と教科の学習の連携によって、漠然としていた意識が明確になり、関心がより高まったものと考えられる。

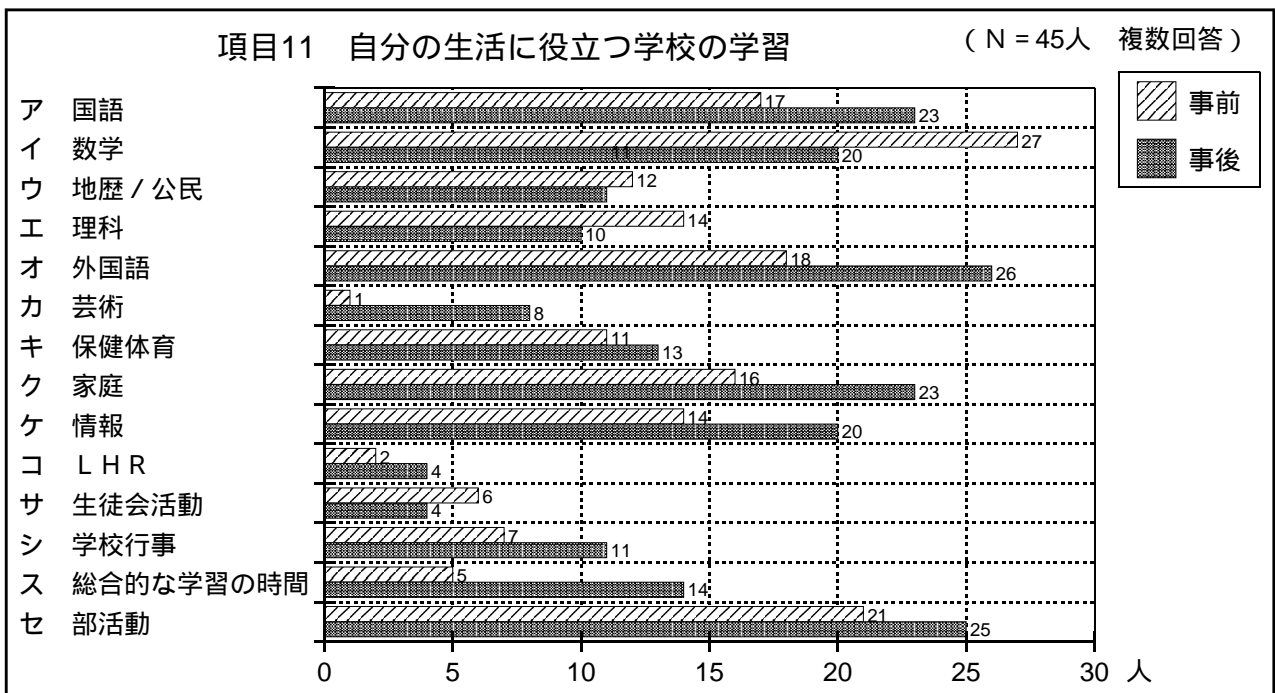
(ウ) 「問題解決」に関する意識

次頁の【図2】項目10「問題解決」の意識では、情報機器を使用した学習により、情報活用能力が向上し、ウ「インターネットで調べる」が大きく増えた。エ「先生に聞く」もやや増え、工夫した教育活動の実践によって、学校教育への信頼、学校知への期待が復活しつつある。



【図2】「問題解決」の意識

(I) 「教科等」に関する意識



【図3】「教科等」に関する意識

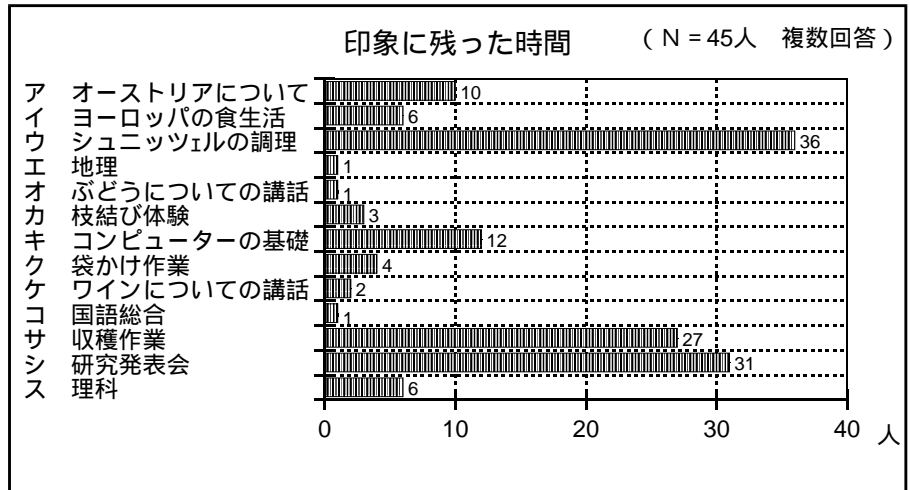
【図3】項目11「教科等に関する意識」では、各教科の学習や学校での活動のうち、生活に役に立つと思うものを複数回答で尋ねた。

その結果、今年度の総合的な学習の時間と関連した授業を实践しなかった教科への回答が大きく減り、一方で、国語、外国語、芸術、情報など、効果的な年間計画を立案し、実践した教科が大きく数を増やしている。シ「学校行事」、セ「部活動」などの伸びは、高校生活の中で、生徒がプロジェクトの実行や人間関係の重要性を学んだ結果であろう。ここで特筆すべきことは、ス「総合的な学習の時間」の大幅な伸びである。教科と関連した総合的な学習の時間が、「生きる力」に結び付いていく現れであると言える。

(オ) 「知の総合化を図る体験的な活動」に関する意識

【図4】は印象に残った時間を3つ以内で答えてもらった事後アンケートの結果である。このことから、知の総合化を図る体験的な活動に関する意識について次のようなことが言える。

予想通り、ウ「シュニツェルの調理」が1位であった。高校に入学して間もない頃のALTによる授業の展開が、



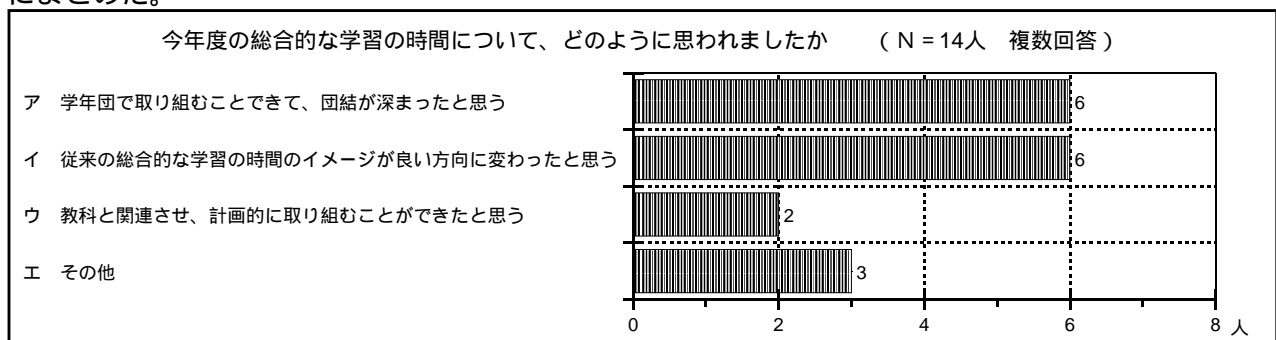
【図4】「知の総合化を図る体験的な活動」に関する意識
 うことの現れである。この授業は生徒たちに「大迫高校に入学して良かった」というスクールアイデンティティーの芽生えをも与えたにちがいない。知識を得ることと、体験的な学習が教科と関連して実現できた例である。サ「収穫作業」も上位を占めているが、ク「袋かけ作業」、カ「枝結び」との相違に注目したい。いずれも農園での体験的な学習であるが、回答数に大きな差異がある。単なる野外での体験的な学習では、教室の中での学習に及ばず、また、内容を厳選しないと学習効果が得られないことがわかる。

また、この中で目を引くのはシ「研究発表会」の回答の多さである。授業時間以外でプレゼンテーション作成にかけた時間と努力がこの結果につながっている。受動的な「コンピューターの基礎」学習より、能動的な「研究発表会」とそのための準備の方が生徒の学習意欲を引き出すことができたと言える。「みんなの発表が聞けて良かった」という声が多く、相互評価も行い、お互いの活動の交流の場となったと考えられる。

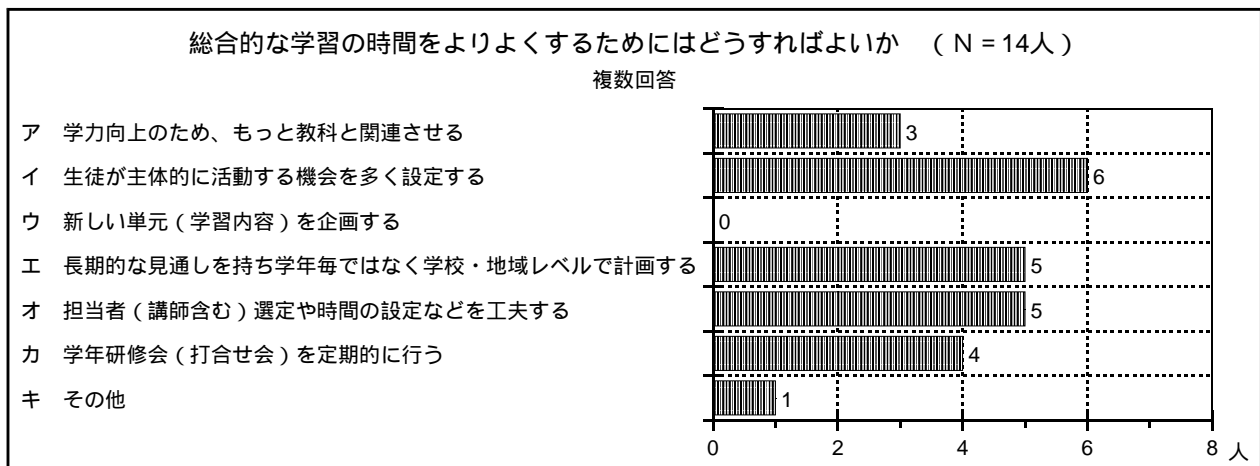
教科と関連した授業は、初めての試みだったため、あまり印象に残らなかったようであるが、ス「理科：発酵」は、1学級だけでの実践で6票も集めている。「実物をもってきてやっていたので良かった」という生徒の声もあったが、この授業は単なる教室内における実物提示の授業ではなく、生徒の野外での体験学習を十分に踏まえたうえで、その体験内容と本時学習内容を結び付けながら展開された緻密な授業であった。「総合と関連させてみよう」と教科担当者が意識することで、生徒に強い印象を与える授業が実現した好例である。他教科でも準備を厭わず、取り組んでいくべきであろう。

エ 教職員の「知の総合化を図る体験的な活動」に関する意識

総合的な学習の時間の実践終了後に、大迫高等学校の全職員に対してアンケートを行った。それらの記述から、総合的な学習の時間にかかわる職員の意識を【図5-1】【図5-2】【表6】のようにまとめた。



【図5-1】「知の総合化を図る体験的な活動」に関する意識(1)



【図5 - 2】「知の総合化を図る体験的な活動」に関する意識(2)

【表6】「知の総合化を図る体験的な活動」に関する意識(3) 教職員の自由記述より

<p>成果と思われる点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全職員での取り組みができた。 ・生徒が発表会のため、放課後もコンピューターに向かっていた。 ・生徒がさらに積極的に取り組むものであればよい。 ・総合的な学習の時間のために教科でその内容を学習するのの一つの方法である。
<p>課題と思われる点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常の時間割と重複した。 ・「主旨」、「ねらい」等について、職員間で十分に討論していない。 ・年間指導計画の中にうまく取り入れられず、唐突な授業と受け取られたのではないか。 ・1単位では混乱する。 ・「ぶどう」については、中学校でも実施しているので再検討を要する。 ・1～3年をとおしたテーマがあってもよいのではないか。 ・読み書き等(基礎学力)を重視した内容にすべきである。

(3) 授業実践の成果と課題

これまで高等学校における総合的な学習の時間の推進に資することを目的に、「知の総合化」を図る体験的な学習活動の展開に関する推進試案に基づき、展開計画の立案と研究協力校における実践及び実践結果の分析と考察をとおして、その妥当性を検討した。検討をとおして明らかとなった成果と課題は次のとおりである。

成果としては、

- ・年間行事計画や各教科の内容、指導の在り方、特別活動等を見渡した教科関連年間計画表を研究協力校に作成してもらうことができた。
- ・教科の枠を超えて、学習の基礎となる知識や体験的な学習活動をとおして外の世界を知ることができた。
- ・生徒のアンケート結果も現状をよく表しており、生徒の関心の傾向を把握することができた。

課題としては、

- ・前年度の反省を生かし、各教科の年間計画を吟味して、負担が少なく、かつ効果的な計画(年間計画・時間配分・時間割)を組み立てる必要がある。
- ・単年度の発想でなく、実情に応じて柔軟に変化する体制づくりを工夫する必要がある。

以上のことから、いわゆる「知の総合化」を図る総合的な学習の時間を計画・提示し、生徒主体の体験的な学習活動を行い、各教科の学習を相互に関連付けることによって、高等学校における総合的な学習の時間の推進に役立つことが確かめられた。

研究のまとめ

1 研究の成果

本研究のねらいは、平成14年度から2年間にわたって、「知の総合化」を図る体験的な学習活動の在り方を明らかにし、高等学校における総合的な学習の時間の推進に資することであった。

昨年度は、2年次研究の第1年次として、「知の総合化」を図る体験的な学習活動の展開を中心に、総合的な学習の時間に関する基本的な考え方についての検討を行い、基本構想を立案するとともに、それに基づく推進試案を作成した。

研究の完結年度である今年度は、推進試案に基づく研究協力校による実践及びその結果の分析と考察をとおして、推進試案の妥当性を検討し、高等学校における総合的な学習の時間に関するまとめを行った。ここでは、これらの研究内容について概括的にまとめることとする。

(1) 「知の総合化」を図る体験的な学習活動をとおした総合的な学習の時間の推進に関する基本構想

学校知と生活知が遊離している現状を解決し、両者を再構成する力が必要であると考え、教科の学力を向上させ、同時に「知の総合化」を目指すことができ、外部要因と内部要因の課題を解決する基本構想図を作成した。

(2) 「知の総合化」を図る体験的な学習活動をとおした総合的な学習の時間の推進に関する実態調査及び分析と考察

教育課程審議会の答申等や先行研究・文献等を参考に、総合的な学習の時間についての基本的な考え方を検討するとともに、県内高等学校の全教員を対象とする総合的な学習の時間にかかわる実態を調査し、総合的な学習の時間を推進するための課題を把握することができた。

(3) 「知の総合化」を図る体験的な学習活動をとおした総合的な学習の時間に関する推進試案の作成

基本構想と調査から明らかになった課題をふまえて、推進試案については、計画概要から詳細な実施案まで作成した。

(4) 「知の総合化」を図る体験的な学習活動をとおした総合的な学習の時間に関する推進試案に基づく展開計画の立案と実践

構想した計画の一部を研究協力校に実践してもらい、今まで以上に生徒と教員の意識・現状を把握することができ、意識を高めることができた。

(5) 「知の総合化」を図る体験的な学習活動をとおした総合的な学習の時間に関する推進試案に基づく実践の分析・考察

現在の体制・指導上の問題点が表出し、点検と改善を繰り返す必要性を再認識できた。

2 今後の課題

この研究では、高等学校における総合的な学習の時間の推進に資するために、「知の総合化」を図る体験的な学習活動の展開を中心に、理論構築とあわせ実践を積み重ねてきた。

今後は、全校的・全学年的に取り組む上での精神的、体制的障壁に対する具体的な解決策や指導計画の作成とともに、目標、内容をふまえた適切な評価方法などについて検討していく必要があると考える。

【参考文献】

今谷順重編，「総合的な学習の新視点」，黎明書房，1998

工藤文三編，「高等学校『総合的な学習』の運営と実践事例」，学事出版，2001

高階玲治著，「総合的学習の学力をどう育てるか」，明治図書，2001

文部科学省編，「中等教育資料11月号」，大日本図書，2002